

はじめに：

著者（1945～）は経済学者で大阪大学名誉教授。2021年5月25日に新潮選書(税込み1,760円)として刊行された本書を、新潮社は「リベラル・アーツの〈凄み〉と〈愉しみ〉が詰まった一冊」と紹介しているが、その通りである。日本経済新聞6月10日夕刊『目利きの選ぶ3冊』で、経営学者中沢孝夫氏(1944～)が、「上半期、最良の収穫本」として5つ星を与えているのも頷ける。

出版社紹介文と書名について：

「音楽家たちを一流の思想家として描き直し、彼らが見事に捉えていた政治と経済の構造変化から近代社会の光と影を浮かび上がらせる」との出版社紹介の中、筆者が下線を施した部分の記述は**書名**にはふさわしくても、**内容**と合致するように思えない。近代の大作曲家たちの政治経済の構造変化への対応と苦闘が語られてはいるのだが、クラシック音楽の歩みを捉える著者の視点は、音楽家の思想よりも、むしろトクヴィル（フランスの思想家）（1805～1859）やアダム・スミス(1723～1790)などの社会思想に依拠しているからである。本書は、『デモクラシーと芸術』というタイトルでWEBに連載されたエッセイを書名変更して一冊にまとめたものであり、こちらのタイトルの方が内容にふさわしい。とりあげられた**思想**は芸術一般に関するものが多いからだ。但し、書かれた**史実**は作曲家と楽曲に焦点が当てられており、巻末に親切な「楽曲リスト」まで添えられているので、『デモクラシーとクラシック音楽』が最適なタイトルではなかろうか。

民主制への過程と芸術：

西洋音楽の場は、教会(聖)から劇場(俗)へ、更に民主制の進展と共に大衆化してきた。著書『アメリカのデモクラシー』で有名な、トクヴィルは、自由と平等に重きを置く民主制のもとでは人々が競争的、かつ多忙になるのが特徴と見る。結果、芸術を生活の彼方にある「実在としての美」と考える姿勢を失わせ、具体的で分かりやすい美への欲求を拡大させる。広範な聴き手を意識したベートーヴェン(1770～1827)は「分かりやすい音楽」を意図していたように筆者には思える。

パトロンの推移：

音楽家のパトロンは教会、王侯から、公的教育機関、産業貴族へと移行する。更にフリーランサー的となれば、「金銭」と「多数」の支配から免れにくい。そこで俗物主義と闘うシューマン(1810～1856 作曲家でもある)のような批評家としての擁護者が必要となる。国家がパトロンとなると、スターリン(1878～1953)に面従腹背せざるをえなかったショスタコーヴィッチ(1906～1975)の例も出てくる。

複製技術の時代：

思想家ヴァルター・ベンヤミン(1892～1940)は複製技術による芸術からのアウラの喪失を指摘したが、哲学者アドルノ(1903～1969)は、複製技術は音楽愛好家の集中力を弱め、観賞と言う行為を散漫にするようになったと指摘している。クラシック音楽さえCDよりもデジタル配信が主流になってきている今日、益々そう言えるかもしれない。ピアニスト、グレン・グールド(1932～1982)はある時から演

奏会をやめてレコード録音に専念し、「ホンモノ」論に疑義を呈した。その点ではアドルノと対極にあるとも言える。「継ぎはぎで制作する映画はホンモノではないか？レコード制作も映画と同じ」と言われれば、その通りである。大衆の一人である筆者は芸術の民主化は歓迎である。但し本書が説くように、複製技術により音楽家の才能の僅かな差が所得格差をとまなうスーパースター現象をもたらしているとしたら、それが原因で高価な演奏会には行けなくなる現実も残念なことだ。

ナショナリズムと普遍的な音楽：

J.S.ミル（1806～1873）はナショナリズムが過剰になると言語や民族という要素以外の個人の権利や利害に人間は無関心になると指摘する。著者によれば、ショパン（1810～1849）、ブラームス（1833～1897）、リスト（1811～1886）は民族音楽を採り入れているが、それでナショナリズムの音楽となっているとは言えない。19世紀半ば過ぎ、北欧・東欧でナショナリスティックな要素をおしだす作曲家がでてくるが、チェコのドボルザーク（1841～1904）、ヤナーチェク（1854～1928）の音楽には普遍性（懐かしさと言う共通感覚に訴えるもの）があり、ロシア五人組にはナショナリスティックな心情の発露が強く、チャイコフスキー（1840～1893）の音楽は西欧古典主義をベースにロシア国民音楽的色彩を持たせて「命を長らえた」と著者は見る。

形式主義、感情に直接訴えるもの、分かりやすい音楽：

スペインの哲学者オルテガは個の自立と平等とを尊重する思想が「形式より内容」、抒情に重きをおくロマン主義という形で現れたと見る。一方、「メンデルスゾーン（1809～1847）がバッハ（1685～1750）を復活させた」とよく言われる。が、メンデルスゾーン以前の作曲家たちがバッハの形式の影響を常に受け続けていたのだ。「感覚に直接訴える」要素は、デモクラシーと親和力をもつ。ヴァーグナー（1813～1883）の「感情の表出する」音楽を音楽評論家ハンスリック（1825～1904）は否定したが、指揮者フルトヴェングラー（1886～1954）もヴァーグナーの音楽は「大衆的で作品の中で自己を拡散する」と「静かな節度をもって自己を告白する」ブラームスと対比している。ヴァーグナーは大衆を酔わせる毒をもつと言われるが、筆者個人としては、ヴァーグナーの音楽が総じて分かりやすいとは感じられない。ショスタコーヴィッチを、スターリン、ジダーノフ（1896～1948）が「形式的」と批判し、大衆に分かりやすい曲を強要した「社会主義リアリズム」は、自然と作品との不一致を許容しない。アダム・スミスの説く、経済の「自生的秩序」と「強制的秩序」に照らせば、「社会主義リアリズム」は後者に相当すると著者は考える。

おわりに—デモクラシーと芸術：

筆者は民主化のおかげでクラシック音楽を享受してきた。しかし、著者が説くように、自由に創作活動のできるリベラル・デモクラシー社会でこそ偉大な芸術家が数多く生まれるとは限らず、スターリン体制下でも優れた作曲家は輩出した。音楽評論家、片山杜秀氏（1963～）はNHK「クラシックの迷宮」で、冷戦下、「分かりやすい」ソ連の音楽に対抗すべく、米国が「自由」の強調のため、「分かりにくい」現代音楽の後押しをしたと指摘している。筆者の選好するリベラル・デモクラシーの社会では芸術も多数に照準を当てた市場原理に左右される。今年没後50年のストラビンスキーは嘗て「あらゆる創造の根源には、地上の糧に対する渴望でない渴望が見いだせる」と言ったとのこと。そのような創造のために

は、機会の平等により、「いま」「ここで」に訴える者が勝利する傾向にある現代の博打資本主義を脱し、著者が幸田露伴（1867～1947）から引用する「公益私益が正比例」する社会の実現が望まれる。以上